

予防接種の副反応

前回、予防接種とは「強い病気を軽く済ませるために、弱毒性の病原体をあらかじめ体内に接種する医療」と説明しました。弱毒でも病原体が体内に入ってくるので、多少なりとも体には影響が出ます。この際に起こる、望ましくない反応を「副反応」といい、どんなワクチンにも軽微ながら何らかの副反応があります。

比較的好くみられる軽い副反応には、注射部位の発赤、硬結、疼痛、一時的な発熱、発疹などの症状があります。重い副反応は非常にまれですが、数万回に1回程度、呼吸障害や血圧の低下を来すことがあるので、医療機関ではこのような副反応に対応できる準備をしてから接種を行っています。また、数百万回に1回程度の確率ですが、脳炎や脳症を発症することもあります。

ワクチンには「生ワクチン」と「不活化ワクチン」の2種類があります。生ワクチンによる副反応は、主にその病原体が体内で増殖したことに対する生体の反応なので、接種後1～3週間ほどたってから、発熱など本来の病気に似た症状が出現します。不活化ワクチンによる副反応は、主にワクチンに含まれる病原体の成分や添加物などに対するアレルギー反応で、接種直後から現れます。

小さなお子さんは1年を通して風邪などに頻繁にかかるため、予防接種後に何らかの症状が出現しても予防接種によるものか、別の病気のせいなのかよく分からないことがあります。症状が強いときは自己判断せず、医師に相談してください。

（このコラムは市立病院 病院総務課 電話（260）0111が担当しています。）